

深山幽谷。道なき道を、一人の女性が駆けている。

彼女の名はレイア。この世界でただ一人の「聖女」である。

あまつゆ

「雨露の髪」と讃えられるクリアな水色の髪を流麗になびかせ、純白の法衣を翻して飛び回る身のこなしは、繊細優美な外見と裏腹に俊敏で、豪胆だ。

その華奢な背中を、巨大なガマガエルのような魔物が、あらゆる植物を薙ぎ倒しながら追い回していた。

——ゲコゲコ……プクウ………ブシャツ!!

——デロデロオ………シュウウ………。

時折、魔物が頬を膨らまし、自慢の毒液を吐き出して攻撃してくるのを、洗練された動きでひらひらと躲してゆく。

彼女はこういった状況に慣れているのか、自分の身体の何倍もある魔物に襲われているというのに、臆する様子はみられない。

——ジュル、ジュルルルウツ！

「っ！」

しばらく防戦一方のレイアに焦れたのか、魔物が彼女を直接捕らえようと、ぬめぬめとした長い舌を触手のようにうねらせ、目にも止まらぬ速さで伸ばしてきた。

「くっ……！」

これがこの蛙型の魔物の得意技。獲物を捕まえてひと息に呑み込もうとする、大掛かりな攻撃だ。

だが、唾液に塗れた舌を辛うじて回避したレイアは、好機とばかりに目を光らせた。

「——ここです」

切り札ともいえる攻撃を空振りしたことにより、必然的に発生する最大の

隙。レイアはそれを見逃さず、一瞬で魔物の巨体に飛び乗り、背後を取る。

——ゲコオツ!?

そして、そのまま魔物の身体に掌を当てると、この世で彼女ただ一人が持つ、神から賜ったとされる聖女の力——「神力」を込め、詠唱した。

「不浄の者よ、魂の輪に還り入れ。大いなる神の名の下に——『ピュリファイ浄化』」  
清らかな祈りとともに、悪しき魂を浄化する神聖な力が解き放たれる。

——シュワアアア……。

こうして、破壊の限りを尽くした醜悪な魔物は瞬く間に光の粒子となり、跡形も残さず霧散したのであった。

「？　これは……」

たん、と軽い音を立てて着地したレイア。同時に、自身の力の流れに僅か



な滞りを感じ取る。

「いけない、今の戦いに気を取られたせいですね。結界が揺らいでしまいました」

レイアが王命を受けて王国と魔族領との境に張った結界は、今や人間側の防衛の要だ。広大な国土を全てカバーするその障壁は魔族の侵入を一切許さないほど強固だが、維持するためには彼女が常に意識し、多くの力を流し込まねばならない。

また、強力な魔物や大群での襲撃によって破られてしまう可能性もゼロではないため、兆候があれば都度レイアが赴いて退けていた。

「きちんと張っておかなければ、国境守備隊の皆様が怪我をしてしまうというのに。……まだまだ力のコントロールが稚拙ですね。先日も將軍閣下からお叱りを受けてしまいましたし」

それはレイアがドラゴンの群れと死闘を繰り広げていたときのこと。結界が綻んで極小の穴が空き、辺境の砦にツノウサギが数匹迷い込んでしまったそうだ。

険しい顔をした將軍に「手を抜いてもらっては困る」「貴殿が怠けたせいで陛下の大切な兵が何人も傷ついたのだ」と厳しく叱責され、己の未熟さに肩を落としたのは記憶に新しい。

「……いえ、落ち込んでいる暇などありません」

ぱちん、と左右の頬を叩いて気持ちを切り替えたレイアは、結界の揺らぎに意識を集中し、神力を込め直した。

「わたしが、やらないといけないことだから」

レイアがそのつもりで手を付けければ、結界の修復はすぐに完了する。

「……それにしても。聖地にほど近いこの場所に、一体なぜ魔物が出現したのでしょうか？」

そこでようやく、ずっと感じていた疑問に思考を割くことができた。

「結界に穴はないはずですし、この清浄な地に元々生息していたとも考えにくいです。ならば原因は一体——」

「いやはや、惚れ惚れする御業みわざでございましたね」

——刹那、強い悪寒。

バツ、とレイアは勢いよく振り向いた。

パチ、パチ、パチ。

いつの間にか彼女の背後には、気の抜けた拍手をする不審な男が佇んでいた。

「っ、何者です！ ……——神官様？」



咄嗟に警戒を強めたが、よく見れば彼が纏っているのは見慣れた神官服だ。そのことに気づいたレイアは、拍子抜けしたように詰めていた息を吐き出した。

「失礼いたしました。あなたはこの地の神官様、なのですか？」  
「ええ」

男は切れ長の目をした、知性的な顔立ちの美丈夫だ。

顔の一部を隠すように垂れ下がるミルクティーベージュの長い髪が、肩の辺りで緩く一纏めにされている。

（敵でなかったとはいえ、気配に全く気がつきませんでした。油断、していただでしょうか……？）

動揺状態にあるレイアを慮ったのか、先に名乗ったのは男だった。

「はじめまして、聖女様。私は神殿より『聖なる泉』の守り人を仰せつかっ

た神官、デイルと申します。貴女様が泉をお訪ねになるという兆きざしを読み解きましたので、僭越ながらお迎えにあがりました」

その男——デイルは、厳かな空気を醸しつつも柔和な笑みを浮かべる。礼儀正しく丁寧な物腰からみるに敬虔な人物なのであろう、ゆったりとした清潔感のあるローブがより清貧な印象を与えていた。

「……申し遅れました、わたしの名はレイア。ご明察のとおり、来るべき魔王との決戦に備え、神の泪より生なる泉にて禊を行い、神力を高めるために参りました。……全ては、大いなる神の御心のままに」

いくらか落ち着きを取り戻したレイアも名乗りを返し、この地へ来たそもそもの目的を告げる。

そして両手を組んで祈りの形を作るといふ、神殿式の礼を執った。

「……」



——暫しの沈黙。

「？ あ の ……？」

何の反応も返ってこないことを訝しく思ったレイアが、戸惑ったように彼を見上げる。

彼女が違和感を抱くのは当然だ。神に仕える身であるならば、こうした場面では祈りの所作を返すのが作法である。泉の守り人という特別な立ち位置とはいえ、デイルも身分は神官だ。例外ではないはずだった。

にもかかわらず一向に礼を形作らない態度は不自然で、レイアは思わず探るような目を向けてしまう。

「……ああ、いえ、何でもありませんよ、聖女様。さあ、さっそく泉を守る祠へご案内いたしましょう。手・違・いの埋め合わせもしなければいけませんしね」

「……？」

だが、デイルの明るいブラウンの瞳から、特に読み取れるものはなく。

（泉の守り人に任ぜられる程の人物ですから、その信仰心は疑うべくもありませんが……）

レイアは腑に落ちない顔をしながらも、彼について行くしかないのだった。

そう、このときのレイアは目の前のデイルに意識を向けていた。

だから、たとえば彼女の背後で景色がぐにやりと不気味に歪んでいたとしても、気づけるはずがなかったのだ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

祠は、背面をぴったりと崖に接する形で造られている。

デイルの説明によれば、建物部分はいくまで自然洞窟の入口に後付けで備え付けられたもの。神官一人が辛うじて寝泊まりできる程度の広さでしかないとのことだった。主体は魔法陣の浮かぶ重厚な扉で守られた洞窟の方であり、聖なる泉はその中に湧き出ているのだという。

「しかし噂には聞いておりましたが、聖女様はあまりにも美しい」

口数の少ないレイアを気遣ったのか、扉に施された複雑な魔法錠を解きながら、デイルが軽い調子で話しかけた。

「……はあ……」

だが、容姿に言及されることを密かに苦手としているレイアは、どう答えて良いのかがわからない。ただ曖昧に濁すことしかできなかった。

「ふふ、本当ですよ？ この国の王子殿下が、あの手この手で言い寄ってお



られるというのも頷けます」

「う……」

おまけに苦手になった原因そのものの話題を悪意なく畳み掛けられ、辟易してしまう。

「あの、わたしは全てを神に捧げた身ですので、そういった話は……」

「……。そうですか、もったいないことです。……その麗しいかんばせは勿論、滴る雨露のように透きとおった絹髪も、雫が淵を為したように深い青色の瞳も、春風に舞う花卉のようにふっくらと儂い薄桃色の唇も、きめ細かく滑らかで透明感のある肌も、しなやかで優美な曲線を描く肢体も、たわわに実った食べ頃のお胸も、思わず撫で回したくなる桃尻も……コホン。いかなる強敵にも臆さぬ凜とした佇まいも、誠実で清らかな煌めきを湛えて輝く魂も、何もかも。昔からずーっと変わらず、この世に二つとない美しさを

放っているというのに……」

「……？ あ、あの……？」

突然ボソボソと早口で捲し立てられ、レイアの二の腕がぞわぞわと粟立った。だが、世俗に疎い彼女は内容のほとんどに理解が及ばなかったこともあり、なぜそうなったのかを自覚できずに困惑する。

「……」

ディルもまた、何かを堪えるように黙り込んでしまった。

「……」

「……」

微妙な空気を遮るように、ヴン、と腹の底に低い音——魔法錠の解錠音が鳴る。

「さ、開きましたよ。参りましょう」

「は……はい」

途端に打って変わって爽やかな声色を取り戻したディールは、重そうな扉を軽々と押し開き、未だ戸惑うレイアを内側へと誘った。いざな

「こちらが泉の間。奥に見えるのが聖なる泉です」

「……これは……」

レイアは思わずほう、と感嘆の息を漏らした。

——まさに神秘的。

磨かれた石材で建てられていた祠部分とは違い、ここはほとんど人の手が入っていない。荘厳な鍾乳洞をそのまま残した空間となっているようだ。

「とはいえ、長旅でお疲れでしょう。まずはあちらのソファで少しお休みになられては？ 何もない洞窟では失礼かと、聖女様をお迎えするために特別



に誂えたのです。温かい紅茶と甘い焼き菓子も用意してございますよ」

「えっ？」

デイルが唐突に示した先には、自然洞窟の雰囲気には不釣り合いな、やけに座面の広い豪華なソファ。側のテーブルには上品なデザインのティーセットが綺麗にセッティングされている。

そして湯気を立てるカップの横に置かれた小皿の上には……。

——お菓子！

一瞬、レイアの瞳が少女のようにキラキラと輝いた。

（いつも目の前で尊い方々が召し上がるのを眺めるばかりだった、あの……）  
こくり、と震えるように喉が鳴る。

しかし同時に——もはや反射的に——神に選ばれた聖女たる己の立場を思い出す。

また、自身をじっと見つめるデイルの視線も無視できないものだった。

慌てて表情を引き締めたレイアは、できる限り厳格さの滲む口調を心がける。

「……わたしがこの地を訪れたのはあくまで禊のため。神に祈りを捧げ、身を清める儀式を前に、そのような品は必要ありません」

「おや、そうですか？ 残念です」

「……」

俗世の誘惑に一瞬でも惹き寄せられた後ろめたさのせいだろうか。デイルの声もどこか笑いを含んだものに聞こえてしまう。思い過ごしとわかっていても、少々居心地が悪かった。

「申し訳ありません。……お心遣いは、嬉しいのですが」

「いえいえ、滅相もございません！ どのような状況にあっても禁欲を貫く



聖女様の精神、素晴らしきものと感服いたしました。……ぐずぐずに蕩かして台無しにしてしまいたいほどに、ね。……ああいえ、何でもございませんですよ？ では、儀式の説明をいたしましょう」

途中、急に声を落とした部分の内容は聞き取れなかった。

……聞き取れなかったが、その声や瞳から妙に肌にへばりつくような粘度を感じた気がして、本能的に身を震わせる。

しかし目の前のデイルは変わらず穏やかに微笑んでいるだけで、不審な点があるわけではない。

——不審な点がない？ 当たり前だ、彼は神官なのだから。

（ああ！ 最も信頼すべき神官様に胡乱な目を向けてしまうなんて、罪深いことです。それに、浅ましい欲求に惑わされてしまったのも。わたしの心はなんと弱く、修行の足りていないことでしょう）



レイアは今まで何度もしてきたように、己の不信心を深く恥じた。

そうして、確かに生まれかけていた疑念に強く、きつく蓋をしたのだった。

礼拝や禊といった神聖な儀式には、定められた手順がある。

それは必ず従わなければならない絶対のルールで、一つでも誤れば加護を受けられなくなるばかりか、神への冒瀆となりかねない。

その厳しさをよくよく理解しているレイアは、デイルの話に真剣に耳を傾けた。

「聖なる泉に入り禊を行うにあたって、着用が許されるのは『聖女の衣』のみでございます。ですので、肌着やその他の衣服、装飾の一切は外してこちらの台座に置いてください。また、儀礼に則り、守り人である私も終始立ち会わせていただきますね」

「えっ」

しかし説明が始まった途端、レイアはピシリと固まり、目に見えて動揺した。

「……ほ、本当に全て外さなければいけませんか？」

躊躇するのにも無理はない。

彼女が法衣の下に着ている「聖女の衣」は、胸元が打ち合わせになった純白のワンピース状のもので、ストンとした形状のウエスト部分を金色の腰紐で絞った作りをしている。

神が纏うとされる衣と対になるような、ゆったりと神々しいデザインだ。

もちろん見た目だけではなく、神の強力な加護を受けており、炎や吹雪といった魔法攻撃への耐性を得られる優れた装備だが……内側に着ることを前提としているだけあって、些か素材が薄いのだ。



最低限の下着すら身に付けない状態で水に濡れれば、きつと肌に張り付いて、色々と透けてしまうであろうことは明らかだった。

「その……立ち会いも、どうしても？」

（守り人を任されるほど信仰心の高い、清廉な方とはいえ。さすがに……ら、裸体と見紛うような姿を晒すのは……）

聖女であるレイアは、もちろん人前で必要以上に肌を露出させたことなどない。

いつでもきっちりと法衣を身に纏い、神に仕える女性の筆頭として模範的な存在であるよう振る舞ってきた。

——なのに今、あられもない格好を男性の目の前で？

（聖女として相応しい姿とは到底思えませんし、それに……）

じわじわと紅潮してきた頬を隠すように、片手で口元を覆う。



(……恥ずかしい……！)

湧き上がる羞恥に耐えられず、つい顔を逸らしてしまうレイア。

その視界の外で、じっと見つめるデイルの瞳にチロリ、興奮したような熱が走ったことに、やはり彼女は気づかない。

「お気持ちはお察ししますが、申し訳ございません。そういうしきたりですので」

心底申し訳なさそうに微笑んでいるのに、デイルの口調には有無を言わせない威圧感があった。

責任感の強そうな人物だから、役目を全うせねばという思いが強いのだろうか。

「ですが……」

「神が定め給うた儀礼は絶対。僅かでも違えることは許されないと、貴女が

一番よく御存じでしょう？　どうかご理解ください。これは神の御意思、なのですよ」

「っ……」

神の御意思だと、そう言われれば何も反論できはしない。

聖女であるレイアは神に忠誠を誓う者。

その意向に逆らうなどあり得ないからだ。

「……わかり、ました……」

だから最初から拒否権は無いも同然で、結局、消え入りそうな声で了承せざるを得なかった。

「……」

レイアは羞恥に震えながらも、法衣や装飾品をひとつひとつ脱ぎ、外して

泉の傍の台座に置いていく。

少し躊躇<sup>ためら</sup>って、神殿から授かった加護付きのサークレットも丁寧<sup>ていねい</sup>に外し、  
畳んだ法衣の上にそっと載せた。

「ありがとうございます、聖女様。私も無事にお役目が果たせそうで安心しましたよ。……貴女の美しい雨露の髪に、その忌々しい金色は似合いませんし……っと、こちらの話です」

「？ いえ……」

所々声を落として話すのはデイルの癖なのだろうか。

また一部を聞き取れなかったが、今は彼の存在を意識すると余計に恥ずかしさが増してしまうので、会話を最小限にしたいレイアはあえて気にしないようにした。

そうしているうちに、とうとう着ている衣服が「聖女の衣」とその内側の



みになってしまふ。

（下着、を脱ぐのは、できるだけ服の下で……。どうか、目を逸らしてくださいように）

レイアは覚悟を決めるように息を吸った。

——するり、……。するり。

一枚ずつ、音を立てずに、努めて小さな動きでその身から剥がしてゆく。

——じいーっ。

（ううう……。見ないでえ……。！）

切なる願いも空しく、極力デイルの目に触れないようにと下着を脱いでいく間。

彼はレイアの一挙一動を、ねっとりじっとりと見守っていた。

＊ ＊ ＊ ＊

「準備がお済みのようですね。では始めるといたしましょう。どうぞ、こちらへ」

「……はい」

（うう、恥ずかしかった……！）

結局、終始デイルの視線に晒される羽目になったレイア。既に心は満身創痍だが、まだまだ肝心の楔はこれからである。

（——それでも、この儀式は魔王との決戦の行方を左右する重要なもの。つまり全ての人々の未来がかかっているといっても過言ではない……。この程度のこととで怖気づいて失敗するわけにはいかないのです）

そう己を奮起させ、泉の三分の一ほどまで伸びた栈橋のような足場に立つ。

鍾乳洞の奥に湧き出る聖なる泉。改めて臨んだ水面は印象よりも広く、中ほどまではまだ距離があるようだった。

「この泉の中心に御身をしっかりと浸し、神への祈りを捧げながら身を清めるのです。……それと一度入水したら儀式の完了まで上がることは許されませんので、ご承知おきくださいね」

「わかりました」

デイルの指示に従い、足先からそっと泉に浸かっていく。

——ちやぷん……。

青く美しい泉の水は、ほどよくひんやりとして心地良かった。

「……」

広さがある割に水深はさほど深くなく、水に浸かるのは太腿の辺りまでだ。そのまま余計な波紋を立てないよう中ほどまで進んだところで、胸元まで



とっぷりと浸るように座り込む。

ピチョン、ピチョンとどこかで水滴が落ちる音だけが響く静寂の中、レイアは目を瞑って両手を組むと、定められた儀礼に則って、心の中で神への祈りの言葉を唱え始めた。

——祈りが中盤に差し掛かったころ。

「……？」

レイアは身体に僅かな違和感を覚えた、気がした。

（気のせい？ いえ……）

少しだけ火照りを感じるような、肌の感覚がピリピリと鋭敏になったような。

（これが神力を高めるという、聖なる泉の効果なのでしょうか……？）

いずれにせよ、禊の途中で集中を乱すわけにはいかない。  
レイアは雑念を振り払い、またひたすらに祈り続けた。

——しかし。

「……んっ……」

終盤に近づくにつれて、違和感は看過できないほど強くなっていく。

「ううっ……ん……♡」

その段階になってようやく、レイアは自分の身体が異常なほど熱く高ぶっていることに気がついた。

「ん……あっ……、ふううっ……♡」

——これは違う。明らかに、何かがおかしい。

（いけません、このままここにいてはっ……！）

身体を侵食する感覚の正体はわからずとも、危険を悟って泉から出ようと振り返った、その時。

「ふふ、やっと効いてきたようですね♡」

デイルの、底抜けに嬉しそうな声が響いた。

「!？」

「でも駄目ですよ、途中で上がってはいけませんと申しましたのに。聖女様は悪い子ですねえ♡」

「あっ、あなた……!」

足場の端からニヤニヤとこちらを眺めている、厭らしく弧を描いた双眼。目つきがおかしいと感じた時には、すでに遅く。

「あんっ……♡」

慌てて立ち上がったレイアは、がくりと膝から崩れ落ちてしまった。



じゃぶん、と音を立てて水面が荒れる。

「くく、ついに力が入らなくなりましたか？ 無理もない、聖女といえどこれだけ長く身を浸していればね」

「っ、何を、したのです……!? この泉は、一体……!」

デイルはもはや恍惚とした顔を隠すことさえしていない。

「お気づきのとおり、この場所は最初から『聖なる泉』などではありません。――聖女レイア。貴女を籠絡するために私が手塩にかけて作り上げた、『催淫の泉』なのですよ♡」

「さい、いん……?」

清廉潔白な聖女にとっては聞き慣れない言葉。<sup>ワード</sup>レイアが意味を察するまでには、暫しの時間を要した。

「っ！ そんな、だって、確かに……!」

秘境にある祠とはいえ、細心の注意を払って正しい道を通ってきたはずで、何事にも慎重なレイアが、道を間違えるなどという初歩的なミスを、犯すはずがないのに。

「ほら、身体が火照って、とても敏感になるでしょう？　それこそがこの『催淫の泉』の効果。……素晴らしいと思いませんか？」

「くっ、んん……♡」

だが、今のレイアに筋道立てて考える余裕など与えられてはいない。

「貴女に堕ちていただくために、私が数百年の時をかけて育て上げた特製の媚毒です。っくく、味わわれる気分はどうですか？」

「さ、いあく、です……！♡」

レイアは憎々しげにデイルを睨み付けるが、潤んだ瞳と赤く染まった頬では迫力などあるはずもなく、彼の勝ち誇った笑みを深くさせるだけだった。



（どうして……どうしてわたしは、こんな男の口車に、簡単に……！）

後悔の滲む疑問を口に出す前に、それを見透かしたようにデイルが語る。

「敬虔な信徒である聖女様は、神殿に属する人間を無条件に信用してしまう癖がありますね？　だから神官として現れた私を、貴女は一切疑うことができなかった。なぜなら、物心つく前からそう『教育』されてきたから。――私はただ、この衣装を着て『守り人』を名乗るだけで良かったのです。つまり今の状況は貴女の失態というより、神官どもの欲望と保身の賜物たまものですね」

「……っ、あなたは一体、何者なのですか!？」

「ああ、そうでした。そろそろ本当の名前をお教えしましょう」

彼は勿体ぶった動作で手のひらを胸に当て、恭しく礼をとった。

「我が名はユデイル。魔大陸を棲処すみかとし、真なる美を探求する一族の長」

「……!!」



告げられた名前には、心当たりがある。

「ユデイル……まさか、『魔参謀ユデイル』!？」

「いかにも。貴女が倒した私の手駒から、何度も聞いた名でしよう？」  
確かにその通りだが、それだけではない。

「魔参謀ユデイル」といえば、人間の国にも知られていて、古の文献や口伝にも残され、伝えられている存在だ。

曰く、人と魔族の長きに亘る戦いの中で、幾度も聖女の行く手を阻み、あらゆる奸計を巡らして人々に仇なす卑劣な策略家。

また、魔王が討たれるたび妖しの術で何処かへと逃げ延びて、その復活に必ず手を貸してきた従順なる僕、とも言われている。

「っ……♡あなたが……、古くから魔王に仕える腹心、なのですね……!」

「まあそんなようなものです。——そして、これが私の本来の姿」

すい、と指揮者のような動きで手首を振ると、みるみるうちにデイルの姿が変わっていく。

質素で控えめなローブは、黒々とした魔王軍の軍装に。

温かなミルクティーのようだった髪は、真夜中を思わせる暗く深い藍色に。明るいブラウンの瞳は、黒い瞳孔がドラゴンや蛇の如く縦長に伸び、虹彩は禍々しい銀色に。

健康的に見えた肌は魔族特有の透き通るような白に変化し、口元からは鋭い牙が覗いていた。

全ての変化が終わった——正しくは擬態魔法が解かれた——後、そこに立っていたのは、賢<sup>さか</sup>しい笑みを称えた不穏な男。

よく見れば顔の造形自体は変わらないようだが、にもかかわらず、厳かで誠実な守り人の面影は欠片も残っていない。



そのあまりの変貌に、レイアは戦慄いた。

「驚きましたか？　ですが、これで信じていただけでしょう。催淫の泉を作ったのも、聖なる泉へと向かう貴女を幻術で惑わし、道を逸れさせてここへ誘導したのも、全てこのユディールの仕業だと。貴女は最初から今に至るまでずっと、私の掌の上で可愛らしく踊っていたのですよ♡」

「っ！　そんな、どうしてっ……！？　げんじゅつ、なんて……、わたしが、気づかないわけが……ああっ♡」

悪意に満ちた魔族の術に聖女が惑わされることなど、絶対にありえない。神力を宿す聖女の瞳は、それらを確実に見破ることができるからだ。

「さあ、何故でしょうねえ？」

おちよくるように小首を傾げるユディール。

惚けた態度に、レイアはぎり、と奥歯を噛み締めた。



「そんなことより、ほら。早く上がらなくていいんですか？　いつまでも媚毒に浸かっているのは、気を狂わされてしまいますよ♡」

「っ、はああ……ん♡あー……♡」

悔しいことに、確かに身体は限界を迎えている。必死に抑えようとしても漏れ出てしまう甘い声と、熱く、荒くなった吐息が、そのことを如実に物語っていた。

（これっ、時間が経つほど、肌に染み込んでっ……♡）

彼が媚毒と呼ぶ泉の水は、浸かり続けるほどにその効力を増すようで。既にいくつもの敏感な部分が、より強い疼きを覚え始めていた。

「あー……♡あっ……あああー……♡」

初めて味わう熱に浮かされ、まともに思考することすら難しくなっていく。  
（だ、め……。はやく、でな、いと……。♡）

レイアは僅かに残った理性と力をかき集め、水圧と快感に足をとられながらも、何とか足場を掴み、這う這うの体で泉から抜け出した。

その場に立ち上がった彼女は必然的に、ユディールを正面にして対峙する形になる。

彼はレイアの全身を視界に捉えると、うっとりとした表情で情欲に濡れた息を漏らした。

それもそのはず、彼女が不本意にも敵前に晒してしまった姿は――……。髪や衣から滴り落ちる雫が色気を増し、たっぷり水を含んだ聖女の衣はびたりと張り付いて肌を透けさせ、身体のラインを露呈させている。ハアハアと荒く息をする彼女の頬は赤く染まり、潤んだ瞳はとろとろに蕩け、時折焦点を曖昧に揺らしていた。

それでも羞恥心からか、ほとんど露わに透けているだろう胸元や秘部に手



を回して必死に隠す姿は、あまりにも扇情的であった。

その全身を舐め回すように眺めたユディールは、ごくりと喉を鳴らす。

「……美しい……。やはり人間どもの目は節穴ですね」

「……？♡」

そしてドロリと欲に塗れた双眼を三日月型に歪め、見せつけるように両手を広げると、一歩ずつ、ゆっくりと近づいてきた。

「ささ、早くこちらにおいでなさい。たーっぷり苛めて、可愛がって差し上げますから♡」

その視線や言葉にすら、レイアはびくりと反応してしまう。自分の身体が今何を求めているのかなど、気づきたくもなかった。

——だが、まだ彼女は負けていない。

「っ、不埒な……！♡ ……っ、ホーリー・フラッシュ『聖なる閃光』！」



「！ 目眩まし!? まだそんな余裕が……!」

(反撃は、機を逃さず迅速に。それが戦闘の基本です！)

レイアの掌から瞬時に放たれた眩い光が、ユディールの視界を白く染める。その隙を突くように、レイアはユディールの横をするりと駆け抜ける――  
……。

……――はずだった。

「んっふふふ♡」

「あっ……!?♡」

がっしりと、ユディールの逞しい手に腕を掴まれ、彼の懷へと強引に引き寄せられることさえなかったら、だ。

「駄目ですよ♡逃げられるはずないじゃないですか♡」

あっさりと捕えられてしまったレイア。耳元に息を吹き込むように低い声

で囁かれ、掌で腰をするりと撫でられる。

「やあっ……♡あぁう……♡」

それだけでびくびくと快感が走り、力が抜け、まともに抵抗できなくなってしまう。たまらず、ユディールの胸板に身体を預けるように倒れ込んだ。

「はあ……♡そんなふらふらの状態でこの私から逃げようだなんて。とても健気で、無謀で、可愛らしい……♡」

力の入らない彼女をしっかりと抱き止めながら、ユディールはついでとばかりに背中をつう、となぞり上げる。

「はあっ♡ん……♡」

「ほうら、少し撫でて差し上げるだけで、こんなに感じてしまうのに」

「やめ、てえ……！♡」

「これ、たまらないですか？ ……ふふ、もう勝敗は決したも同然ですねえ

♡ん……ちゅぷ♡」

「!? ひあっ……♡なに!?」

レイアの耳に突然、生暖かく濡れた何かが張り付いた。

背や腰を撫でられた時とは違う、正体不明の、ぞくぞくと身震いするよう  
な快感。

狼狽する彼女の様子を見たユディールは、心底愉しそうに笑った。

「あはっ……♡耳責め<sup>こんなこと</sup>なんて、もちろんご存知ないですよね♡高潔で聡明な  
聖女様のお耳は、とーっても初心<sup>うぶ</sup>で可愛らしいですものねえ♡」

そして、無防備に晒されたままの耳に再びちろりと舌を這わせる。

「ひゃん!?♡ なに、これえっ♡なんで、なめっ!? あん♡い、いやあっ  
……!♡」

ちろ♡ちろちろ♡れる♡ちゅー♡♡



「ひっ……♡あっ……♡」

れろ、れろ♡ちゅぱっ♡……じゅるるっ♡じゅぷじゅぷ♡

「ふあああ♡」

（わからな、も、や、です♡怖い、こわいっ……！♡）

敵の幹部に良いようにされている状況、自身を脅かす未知の感覚、理解の範疇を超えた謎の行為。それら全てが、これまで彼女の身近にあった物理的な恐怖——たとえばたった一人で四天王格の魔將軍を相手取るだとか——とは別種の恐れをレイアに抱かせた。

どんな逆境においても冷静であろうとする聖女の矜持とは裏腹に、慣れない恐怖に上手く対処できないまま、纏わりつく舌ごと振り払うように、いやいやと頭を振る。

その葛藤を、自らが手の内に捕えた聖女の一挙手一投足を注視しているこ

の男が、見逃すはずもなかった。

「ふっ、ふふふふふふ……！　もしかして……怖いのですか？♡　ふ、は♡……そう、そうですよね。おかawaiiそうに……♡ああでも、怯える貴女の、なんと美しいことか♡」

ユディールは感極まった様子で、抵抗するレイアの頬をべろーり♡と舐め上げる。

「ひっ……♡」

「大丈夫、優しく教え込んで差し上げますよ。あなたはもう、私の所有する最高の美術品になったということ♡」

まろやかな肌を味わったユディールは、弱々しく身をよじって逃れようとするレイアの身体を押さえ込むと、まるで恋人のようにぎゅう、と抱きしめた。



そうして淫らな泉の水を含んで肌に纏わりつく布地の上から、しなやかな肢体を撫で回す。

「ん、うゝゝ♡♡」

「貴女が着ているそれ、『聖女の衣』。水に濡れた布地が身体に貼り付いて、うっすら肌の色を透けさせていて、とってもいやらしいですよ♡わざわざそんな服を選んで加護を与え、うら若き乙女に着用を強制するだなんて……神というのはとんだ色狂いだ♡」

「っ！♡ ……かつ、神を愚弄することは、許しません……！」

からかうように紡がれたそれは、レイアにとっては許しがたい内容だ。怒りに刺激され、すっかり翻弄されていた深い青の瞳が再び光を灯した。

「でも、事実でしょう？ 神など面倒事を聖女に押しつけるしか能のない怠け者、貴女が思うほど崇高な存在ではありませんよ。そんな奴のことは忘れ



て、もっと私と楽しみましょう♡」

「ふざけない、で、くださいっ！　神は全知にして全能、地上のあまねく生命を守護する、最も尊き御方！　それを侮辱し、忘れろなど世迷い言を……！　っはぁ♡、わたしは神に全てを捧げた聖女、そんなことで忠誠を揺さぶれると思いましたがっ！」

「またそれですか……」

——スウツ。

ユデイルの目が冷たく細められる。

「貴女はいつもそうですね。……いい加減、聞き飽きましたよ」

「!?　んうっ……！」

彼は微かに苛立った様子でレイアの顎を捕えると、その可憐な唇を奪うように深く口づけた。

「むー!? ……んっ、んんー!♡」

「あむ、……ん……ちゅう、ちゅぷ……れる……♡」

必死に逃げ回る小さな舌を、ユディールは執拗に追い回す。

「んー♡ちゆる、ちゆる♡……はあっ……♡」

ひとしきり嬲ったところで、ぷはっ、と唇が離された。

唐突に解放されたレイアは、ふわふわと浮かされた表情をしていたが、すぐに正気を取り戻したのか慌てて顔を逸らし、唇を固く閉じて拒絶の意を示す。

ユディールはその反応に機嫌の良い笑いをこぼすと、彼女の耳元で囁いた。

「……っふふ♡随分必死に逃げ回って……。私の舌に絡め取られなくなかったですか？ 貞淑な貴女らしくて可愛らしい反応だ♡」

「……っ♡」

「でも、次は許しません♡貴女のか弱い舌に、ほら♡私のこの舌で巻きついて、舐め回して……♡」

——べろお♡

長く厚い男性の舌をレイアの眼前に突き出し、見せつけるように怪しくうねらせる。

「……や……♡」

「ふふっ、たーくさん、苛めてあげますからね♡そして貴女の頭の中を、もっと私でいっぱい……♡」

（ああ……また、あの舌で……本気で、されたら……♡）

この先の責めを否応なしに想像させられて慄き、より唇を固く結ぶレイア。その無防備な耳を、ユデイルがついでとばかりにしろ♡と舐め上げた。

「……ひゃうっ!?!♡ ん、むう!♡」



(しまっ……!)

たまらず声を上げた隙に再び唇に食らい付かれ、舌を強引にねじ込まれてしまう。

「むっっ♡……うん♡」

なんとか逃げようと右往左往するも、先ほどとは違い獰猛な蛇のように激しく動く舌にあっという間に巻き付かれ、捕獲された。

「んむううう!?!♡」

ぷちゅう♡じゅるじゅる♡ぢゅぱっ♡じゅう♡じゅぷ♡

じゅうじゅう♡じゅぶぶ♡じゅるるるっ♡

「んっっ!♡ んっっっ!!♡♡♡」

神秘的な鍾乳洞に、哀れな舌を容赦なく吸い上げる濁音が鳴り響く。

洞窟内を反響する音はレイアを精神を一層追い詰めるが、それでも耳を塞

ぐこともできず、卑猥な音から逃れることは許されない。

（いや……♡こんなの、いやああ……♡逃げてもすぐ捕まって、吸い尽くされて……♡あたま、ふわふわして、おかしくなるう……♡）

対して、ユディールは逆に興が乗ったように大胆になってゆく。

彼女の顔を逃さないよう押さえつけていた手を太腿や腕に回し、口元で生まれた快感を全身にくまなく伝播させるように撫で回してゆく。

「んちゅう、れろ……♡滑らかな太腿も、んむ、柔らかな腕もこうして撫で回して……♡ちゅぷっ……、お口で感じた気持ちよさを、はむっ♡あなたの身体中に届けてあげましょうね♡」

「うう、ん♡♡んう~~~~~!!♡♡♡」

柔らかな身体を、口内を、心ゆくまで堪能し尽くしたユディールは、最後にちゅぱっ♡と音を立てて唇を離す。

「……ぷはあっ♡……ふっ♡ああ、いい顔ですねえ♡」

そして、とろとろに蕩けた瞳で口を緩く開いたまま、ぽーっと虚空を見つめるレイアを見て、満足そうに笑った。

「では、次はこちらも可愛がって差し上げましょうか♡」

「あっ！ なにをっ……!?!♡」

欲を孕んだままの瞳が次に狙いを定めたのは、濡れそぼった衣がぴったりと張り付いた、たわわな双丘。

左腕をがっしりと腰に回して密着し、レイアの抵抗を封じると、空いたもう片方の手で、ほどよい大きさのふくらみをそっと包み込んだ。

「……あっ……♡」

媚毒の効果で既に布地の上からでもわかるほどにピンと立ち上がった中心を避けるように、広げられた手が、震える胸をゆっくりと揉み上げていく。



「う……♡ん……♡」

頭脳派と謳いながらも逞しい男性の手をありありと感じさせられ、レイアの下腹部がきゅん♡と意図せず疼いた。

「はあー……あの聖女様のお胸を私の手で愛撫できるなんて、光栄の極みです♡」

「ふああああ……♡あっ♡ああ……♡」

掌で突起をころころと転がすように責められれば、媚毒とキスによってすっかり高められたレイアの身体はひとたまりもない。

「抵抗する余裕もないでしょう？ 聖女レイア。貴女は魔王様の腹心である私に、なす術もなく敗北したのですよ♡」

「っ、まだ！ まだ負けてなど、いま……ああんっ！♡」

「おや、これを敗北でなくて何と言うんです？ 敵である魔族の手で身体中

をまさぐられ、振り払うこともできないで……♡」

「はあっ♡うっ……くうっ……♡」

「ほーら、ぷっつりと立っているだけだったことも、もうコリコリに硬く  
なってきましたよ。可愛らしいですね♡」

「やあっ……♡こんなの違う、私じゃ、な……!」

「紛れもなく貴女の痴態ですよ、聖女様♡ほら、受け入れて……♡」

スリスリスリ♡コリツコリツ♡

「うやあゝっ!♡ はああんっ♡」

「ほら、理解して、覚えなさい。そして私に従順になりなさい♡……そう、  
気持ちいい。あなたは今気持ち良いのですよ♡」

「そ、んな、こと……あっ、あっ♡やあああんっ!♡」

与えられる性感は圧倒的で。聖女の無垢な身体にどんどん刷り込まれ、刻

み込まれていく。

「くくっ……もうメロメロですね♡」

彼女の状態を確認したユディールは、愉悦の笑みを浮かべた。

「さて、そろそろ諦めて我が軍門に降<sup>くだ</sup>っていたくださましようか♡」

「！」

レイアはハッと息を呑む。

——軍門に、降る。

ユディールとしては、勝利を確信し、完全に追い詰めるために発した言葉だろう。

しかし彼が思う以上に、聖女にとってそれは大きな衝<sup>インパクト</sup>撃を持つもので。図らずも意識を切り替えるキーワードとなったのだった。

（そうです、わたしがここで負けたら、世界が……！）



レイアの頭の中が急激にクリアになり、蕩けかけていた理性が形を取り戻してゆく。

（魔王軍に太刀打ちできる人間は、この世界に聖女ただ一人。わたしは神に遣わされた、人々を守る唯一の手段。だから何をされても、どんな目に遭っても……絶対に諦めてはいけないのです！）

己の使命と責任を思い出し、強く奮い立つレイア。

散漫になった意識を無理やり束ね、咄嗟に集められるだけの神力をかき集めて、粗く、けれど全力で圧縮する。

そして――。

「なっ!？」

――ドォン!!

そのエネルギーを真っ直ぐ、シンプル単純に解き放った。

到底まともな術とは言えないただの暴発。しかしそれ故に、理詰めで物事を考えるユディールの意表を突くことに成功する。

「くっ！ 貴女、まだそんな理性を残して……！」

苦々しげな台詞が聞こえるということは、決定打にはならなかったのだろう。けれどその声は遠く、相当の距離まで吹き飛ばすことができたようだ。

「はあ、はあ……♡」

（いずれにせよ、悠長に確認している暇はありません。急がなければ）

上手く言うことを聞かない身体を叱咤して、レイアは弾かれたように駆け出した。

向かう先は、泉に入る前に所持品や装備品を全て預けたあの台座。そこに置いてきた、もう一つの聖女専用装備、「神秘のサークレット」。

神の加護により全ての状態異常を無効化できる、あのサークレットを身に

付けさえすれば。泉の効果を綺麗さっぱり打ち消し、身体を苛むさいな暴力的な熱からの解放が叶うはずだった。

（もう少し、もう少し……！）

やっと台座の前まで辿り着き、繊細な細工の施された、金色の華奢な輝きに手を伸ばす。

（よかった！ これで……）

レイアの青い瞳に歓喜の光が差し込んだ。

「……駄目ですよ♡」

——ふうっ♡

「っ、はぁんっ!?!♡」

残りほんの数センチ、というところで。

火傷しそうなほどに熱を孕んだ吐息が、耳元に淫靡に吹き込まれる。



同時に、しなやかな筋肉のついた逞しい両腕がレイアの身体を後ろから力強く引き寄せ、そのまま掻き抱くように捕えたのだった。

「あっ♡はな、してっ！ ……あぁっ♡♡」

振り払おうともがいても、未だ纏った衣服に染み込んだ媚毒が肌を浸食し続け、腕を回される感触にすら官能を刺激されてしまう。思うような抵抗など、できるはずもなかった。

（そ、んな……！ 唯一の好機チャンスだったのに……！♡）

「いけない子ですね。ほら、大人しくなさい♡」

レイアを背後から抱きすくめたユディールは、その両胸を下から持ち上げるように揉み上げると、さらに薄紅色の突起をきゅう♡とつまみ上げて駄目押しした。

「きやうううんっ！！♡♡♡」

これまでで一番強い力で為されたその責めは、レイアの身体に電撃が走るような快感をもたらして。

彼女は、あまりの衝撃に腰砕けになってしまったのだった。

「は……♡ああ……♡」

「ふう、危ない危ない。せっかく丹念に染め上げた貴女の身体を、くだらない加護ごときに台無しにされてしまうところでした。……さ、聖女様。これからたっぷり、お仕置きですよ♡」

「い、いやああ……♡」

＊ ＊ ＊ ＊